下っ端戦闘員がドS女怪人を
仕返しセックス

※ご注意

この作品は１８歳以上の方向け
となっておりますので
１８歳未満の閲覧を禁止します。

この作品はフィクションであり、
実在する人物、団体名等とは
一切関係ありません。

◆このCG集の読み方◆

①
漫画と同じように、
右上から左上へ
左上から右下へ
そして右下から左下に
読んでください。

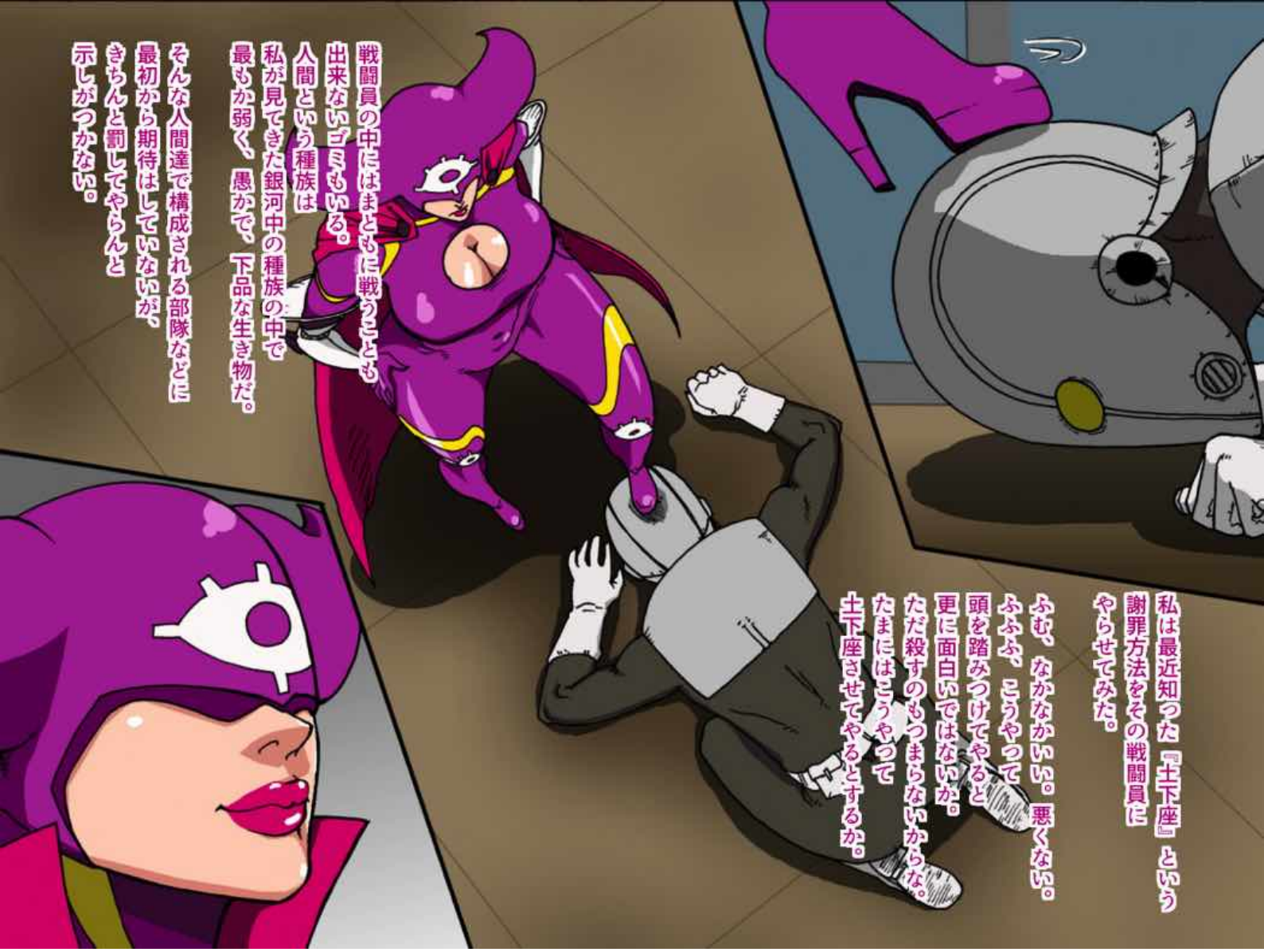
②
ここが空白だったら
飛ばし右下へ
視線移動！

③
ここも空白なら
隣の左下へゴー！

④
こんな感じで
ゆっくり
読み進めて
いってね！

私の名はメーナス・パナ・ルアール。
銀河帝国ゴウカーンの幹部にして
地球侵略軍の司令官の一人。
数か月前、私は母星から呼び出され
地球侵略の一環として
日本という島国を支配するように命じられた。
地球という星は美しいが、
そこには少しばかりの知恵を付けただけで
自分達がこの世の支配者だと勘違いする
愚かな猿どもが矮小な文明を築いていた。
我ら帝国民が地球は移り住むには
奴らは邪魔な存在だ。
しかし帝国の前には人間どもなど
物の数ではない。
日本が我が帝国に屈し、
植民地となる日は近いだろう。

今日は陽動作戦として自らが
囮になって人間の相手をしてやった。
監視センターとやらに襲撃を仕掛け、
人間達の切り札である超人戦隊をおびき出すのだ。
私の作戦通り、超人戦隊が私の策にはまり
ノコノコと姿を現した。
馬鹿め、今頃は戦隊の守りを失った政府施設が
戦闘員達によって攻撃を受けているだろう。
戦闘員達の被害は甚大だが
人間など掃いて捨てるほど
いるのだから問題ではない。
むしろ減れば減るだけこの地球の為になるだろう。
私はセンターの警備兵を蹴散らした後、
戦隊の相手をして時間を稼いだ。
作戦は成功。戦隊を適当にあしらい
悠々と退却してやった。


戦闘員の中にはまともに戦うことも出来ないゴミもいる。
人間という種族は私が見てきた銀河中の種族の中で最もか弱く、愚かで、下品な生き物だ。
そんな人間達で構成される部隊などに最初から期待はしていないが、きちんと罰してやらんと示しがつかない。
私は最近知った『土下座』という謝罪方法をその戦闘員にやらせてみた。
ふむ、なかなかいい。悪くない。
ふふふ、こうやって頭を踏みつけてやると更に面白いではないか。
ただ殺すのもつまらないからな。
たまにはこうやって土下座させてやるとするか。

今日は政治犯を収容した
政府施設が標的だ。
この中には我ら帝国の内部事情に詳しい
下級幹部が収容されている。
放置すれば侵略の妨げになると考え、
部隊を率いて襲撃した。
ついでに超人戦隊とやらに
トドメを刺してやる事にした。
ふん、超人だなんだと言っても
所詮は人間に毛が生えた程度か。
さして苦戦する事も無く、
私は奴らを追い詰めた。

ムニュッ
何者かが私の胸を鷲掴みにした。
握り潰されるかと思うくらいに
強く胸を揉まれた時、
伝わってきたのは痛みではなく、
強烈な性的快感と激しい虚脱感だった。
きゃっ！
ブルンッ
体中の活力が抜けていく感覚、
視界がぼやけ、
意識が遠のいていく…。

意識が戻った時、
視界に入ってきたのは
汚らしいコンクリートの壁。

ジメジメとした空気が鼻腔を通ると
軽い吐き気を催した。

一体どれだけ気絶していたのか。
一瞬か、一分か、一時間か。

体の感覚が戻ってきたとき、
自分の体が宙に浮いている事にやっと気が付いた。
両手が空中に固定されている。
目の前にはニヤニヤといやらしく笑う
一人の戦闘員がいた。
「これは一体どういう事だ、おい貴様！
所属と階級を言え！ここはどこだ！
それに一体何故貴様のような劣等種族が、
私のサイキック能力を…」
「それを教えてどうなる？
これからてめえは俺の性奴隷になるっていうにのよ」
「な、何を言っている、正気か！？
待て…その声、貴様は…」
「気づいたか？てめえのおもちゃにされた哀れな戦闘員だよ」
「くっ、こんな事をしてタダで済むと思うなよ！！」
しかしそうは言ってみたものの、
体に力が入らない。
この程度の念動力すら跳ね返せないとは、
私の体は一体どうしてしまったのだ…。
「へへへ、てめえの体はもう俺のおもちゃだ。
唇も乳房も、下の口も、全部俺が嬲りつくしてやる…」
戦闘員が人間の下品な本性を現した。
万年発情期の猿らしいセリフだ。
「私に指一本でも触れてみろ！
貴様の体を真っ二つに引き裂いてやる！」
私の脅しも知能の低い人間には効果が無かったようだ。
ニヤついた顔を私の方へ近づけてきた。
「やめ、やめろ…」

「うお…すっげえ。エロい乳しやがって…」
「な、何をする！」
この私が、戦闘員に…人間ごときの前で
胸を晒されるなんて…。
「でけえ乳揺らして俺ら戦闘員の前歩いてたくせに、
今更処女みてえに恥ずかしがってんじゃねえよ。
俺にこうして欲しかったんだろ？あ？」
ペロキン
ガルン
「誰が、んん！？」
下劣な男の舌が唇の上を這う。
「ん、んぐぅ…やめ、やめろ…」
奴の舌が私の口の中に入ってこようとしてきた。
必死で歯を食いしばり侵入を防ぐ。
「んん…！んむぅ…」
舌は汚らしい唾液を伴って
私の歯をなぞってきた。
口の周りが奴の唾液まみれになる。
「うう…」
ズルリ
「ぷはぁ！…劣等種族様の唾液は美味しかったか？
え？おい、何とか言ってみろよ」
「精々今のうちに粋がっているがいい…。
貴様は必ず殺してやる。
殺してくれと泣いて懇願するまで、
何か月でも拷問してやる…」
「へえ、威勢がいいねえ。そうでなくちゃ。
次はその乳を頂くぜ」

「……ウッ!!!」
声が漏れないように必死に耐える。
奴が胸を揉むたびに快感が断続的にやってくる。
私の体はどうしてしまったのか。
こんな下劣な人間に触れられてる事自体、
普段なら激しい嫌悪感があるはずなのに…。
奴は私の胸に夢中で、私が快楽に耐えている様子には
まだ気づいていないようだ。…よかった。
ビクンッ
奴の手の力が次第に強くなってくると、
我慢しきれなくなってくる。このままでは…。
「…ん!くぅう…」
「…?」
漏れた声を聞かれたのか、奴は私を不思議そうに見た。
しまった。気づかれてしまったか…?
「…」
少しの沈黙の後、奴は私の胸に顔を近づけた。
奴の唇が私の胸に吸い付く。
「あ!?んあああ!!」
乳首を吸われた瞬間、体に電流が走った。
奴は何度も何度も乳首を吸引して舌で転がしてきた。
「はぁう!」
「げへへ、おい…今の声はなんだよ?お前もしかして…」
「有り得ん!有り得ん!痛みで声が出たのだ!私は決して…!!」
下劣な人間の舌で感じてしまうなんて…。
有り得ない、こんな事は!
狼狽える私を奴はニヤニヤと見つめる。
勝ち誇った顔が私の怒りをさそった。
チュウウウン
ギュウゥ

「こんな乳首ビンビンにさせておいてよぉ、
何感じてねえフリしてんだよ。この淫乱が！」
「く…っ」
「俺みたいな劣等種族に乳首吸われたくらいで
発情した雌犬みたいな鳴いちゃってさぁ…
ヤクザに調教されたアバズレ娼婦だって
もうちょっと慎みを持ってるぞ？」

「しょ、娼婦だと…！？」
下等種族の分際でこの私を、
偉大なる上位種族であるこの私を愚弄するとは…！！
「おいおいおい、なんだよその面は？
自分の淫乱乳首見てよぉ、
反論があるなら言ってみろよ、あ？」

「…これは…うう…」
反論したかった。
これは何かの間違いだと言いたかった。
しかし私の体は奴の凌辱行為によって与えられる
快楽に敏感に反応してしまっていた。

「まあいいさ、じゃあ次は
俺のチンポに奉仕してもらおうか」「チ…え？」

「な、なな、なんだそれは!!?」
「おいおい、ペニスも見た事ねえのか?」
「ペニス?生殖器だと?…嘘をつくな!
人間の雄の股間にこんな醜い物が
付いているなど聞いたことが無いぞ!」
「無いならよ~く見せてやるよ」
「そのおぞましいものを近づけるな!!」
「誰に命令してんだ?
お前自分の立場わかってんのかよ?
いいか?お前は今日からこのチンポ様に
奉仕する性奴隷なんだよ!」
生殖器に奉仕だと!?
何を言っているのだこいつは…。
頭がおかしいんだ、そうに違いない。
「ふざけるな誰が貴様の生殖器など!!」
「生殖器なんて気取った言葉使ってんじゃねえ!
理科の先生かてめえはよぉ!
チンポだ、チンポって言え!
おら、言ってみろ!」
ふざけるなよ人間め、
誰が貴様の言う事など聞くものか…!
私は奴をキッと睨み付けた。
「言わねえならよぉ、
言うまでこうしてやるぜぇ、げへへ」
そういって奴はグロテスクな物を
私の顔に近づけてきた。

それが顔の前に突き出されると、
むわっとする獣臭が鼻をついた。
幾筋も血管の浮き出たその器官は、
先端から透明な粘液を滴らせていた。
その凶悪な見た目から、
かつて銀河を蹂躙した肉食の寄生生物の
頭部を連想させた。
「ぐ、ちょっと知恵がついただけの
猿の分際で、上位種族であるこの私に…」
硬く反り返った生殖器を、奴は私の頬に
何度も押し当ててご満悦に言った。

「言えばいいのだろう、言えば！お、お…」
言ってこの辱めを終わらせなければ…。
「おチ、おチンポ様に…
ご、ご奉仕致します…」
「ぐへへ、なんだ奉仕してくれるのか？
じゃあしてもらおうか」
「な！？話が違う！」
この卑怯者め…、絶対に殺してやる…！

ペチッ

「ほらほら、おチンポ様に
ご奉仕致しますって言ってみな。
言わねえならこいつをお前の顔中に
擦り付けてやるぜぇ？
恥垢も溜まってるからなあ、
一週間は臭いがとれねえだろうなぁ？へへへ。
顔面からチンカス臭まき散らしたまま
一週間過ごすか？え？
俺はどっちでもいいんだぜ？」
「くぅぅ…」
「どうした？早く言えよ」

ペチッ

「擦り付けるのはやめてやるが、
奉仕しなくていいと言った覚えは無いぜ？」
突然、歯を食いしばっていた
私の顎が開き始める。
「…！？」
口が、勝手に…開いてしまう…！
「どうせまた嫌だ嫌だと拒むんだろうからよ、
俺が奉仕の仕方をレクチャーしてやるよ。
お前の手と頭を操ってな」

「おおお、すげえ！」
奴の念動力に動かされるまま、
私の右手はその汚物を慈しむように掴み、
唇を生殖器の先端に吸いつかせた。
舌を先端のツルツルした器官に
絡みつかせると、
「ああ、ははは、…すっげえ、巧いぞぉ」
そう言って奴は気持ちよさそうに呻いた。
その姿を見るだけが何故か
下腹部が熱くなってくる。
私の口からネチャネチャと
粘質の音が鳴り響く。
奴の生殖器から伝わる熱が
じわじわと私の口腔を犯した。
奴の器官から溢れ出る粘液と、
私の唾液が混ざり合った液を飲み下すと、
喉から股間にかけて軽い電流が走った。
体を操られ、抵抗するすべがないのなら
もう諦めるほかないのではないか。
自分の心の中で、
快楽に抵抗する理性が
弱まっていくのを感じた。
焼けるように熱く逞しい人間の生殖器に
舌をこってりと這わせていると、
奴はは意地悪そうに聞いてきた。
「どうだチンポの味は？美味しいか？」
チュウ
ジュル
その嘲るような一言で
快楽に溺れかけた理性は奮い立った。
「ぷはっ！ふざけるな、
貴様のような下等な輩の物など…！
私の頭を操るのを今すぐやめろ！」
ネロォッ
ニチャ
ニチ
一瞬の隙を突いて
体の支配権を奪い返し叫んだ。
しかしその支配権も
またすぐに奪われてしまった。
奴は生殖器を
口の奥深くまで突っ込んできた。
唇が勝手にすぼまり、
粘膜同士が隙間なく吸い付く。
「ああ、すげえ…。たまんねえぇ、
そ、そのまま唇でチンポ様をしごけ…」

「そのまま、いいぞ、強く吸ったまま…
頭を前後に動かせ。ああ、すっげぇえ…」
「んぶっ、んん！ぶちゅ、ジュル！
じゅぼっじゅぼっじゅぼ！！」
ああ、駄目だ…。またあの快感が襲ってくる。
汚物を口に含まされているのに…、
この熱くて、逞しい物が口を犯して…、
喉奥まで突かれるたびに甘い痺れが襲ってくる。

ジュルル♡

「おい、へへへ。なんだよ口では
いやいや言うくせに、はぁっはぁっ、
随分と熱心にしゃぶるじゃねえか？」
貴様がやらせているくせに…！
「俺がやらせているせいだろ、
って思ってるだろう？
でも俺はそこまで動かしてねえぞ。
お前が勝手に動いてるんだ」

ゲチュ♡

チュポ♡

何をふざけた事を、
そんな事あるわけがないだろうが！
「へへ、そんなわけねえって顔だなあ？
はぁっはぁ、うぅ！これヤベぇ…」
「ぢゅるるッ！！ズボッ！
ジュポッジュポッグリュッ！！」

ジュポ♡

「スケベな音たてやがって…くぅ！」
頭の上で奴が呻くと、
ガチガチに硬くなった生殖器が
痙攣を始めた。
「だ、出すぞ…劣等種族の精液を、
お前の口の中に…
たっぷり吐き出してやる…」
出すって、嘘…、まさか…！？

奴は私の頭を掴んでから
生殖器を喉奥まで押し込んできた。
「…んぶぅ!!」
びゅっぶびゅ〜〜〜っびゅっびゅっ!!!!
「うぁ、あああ〜…、あ〜出る出る!」
口腔内に熱くネバつく粘液が
吐き出されるのを感じとった。
「んぅぅ!!んっ!ごくっごくっごくっ…」
私は気管に入って窒息しないよう、
必死にその汚液を飲みこむ。
雄の性欲を口で受け止める事に
激しい嫌悪感が湧くと同時に、
熱いものが胃に溜まっていく
感覚が体を痺れさせた。
(ああ、飲んじゃってる…、
下等な発情猿の精子…
飲まされちゃってる…)

「おぅ、ふぅぅ!おら、まだ出るぞぉ、
人間様の精液を有りがたく頂けよぉ…」
「ごきゅっごくっごくっ!」
何故だ、穢れた雄の液を飲まされているのに
何故こんなに体が火照るのだ…?

「ふぅぅぅ〜、すげぇ…、
こんなに出したの何年ぶりかな」
ずるり、と生殖器が私の口腔から抜き出されると
抑えられていた吐き気が一気に襲ってきた。

ゲゲッ
ビュルッ♥
ドクッ
ブビュ〜
ビュッ♥
ビュクッ♥

「オエエェッ!!」
胃液と混ざった精液が
床にぶちまけられるのを見て
奴は嘲笑った。
「おいおい、折角飲ませてやった
ザーメン全部ゲロっちまいやがって、
幹部様のお口には
人間の精液は
合いませんでしたか?」
「オェェ…」
「まあいい、こんなもんはまだ序の口だ。
これからが本番だぜ」
そう言って奴は
サイキックパワーを溜めた手を
こちらに向けた。
ゲェェ!!
ゲロ…
ビチャァ

体にサイキックエネルギーが降り注ぐと着ていたスーツだけがビリビリと引き裂かれた。
「な、きゃあぁ！」
人間の前で局部を晒されるなんて、こんな辱めを受ける事になるとは…！
「さあ、これからがお楽しみの本番だぜぇ！」
「な、これ以上何をしようというのだ…？」
「ナニに決まってんだろバカが！これからてめえを犯して犯して犯しぬいてやるんだよ！」
そんな…こんなケダモノに、この上位種族たる私が犯されるなんて有り得ない！
「ま、待て！早まるな！ここで引きかえすなら命は助けてやるぞ！」
「はあ？何言ってんだ？」
ビリィッ
ビリッ
銀河帝国幹部に手を出すという事。馬鹿な人間にはこれがどれだけ危険な事かわからないのか！？
「なんで俺がお前と同じ能力を使えると思う？なんで今お前は能力を使えないと思う？」
「…どういう事だ？」

体にサイキックエネルギーが
降り注ぐと
着ていたスーツだけが
ビリビリと引き裂かれた。
「な、きゃああ！」
人間の前で局部を晒されるなんて、
こんな辱めを受ける事になるとは……！
「さあ、これからがお楽しみの本番だぜぇ！」
「な、これ以上何をしようというのだ…？」
「ナニに決まってんだろバカが！
これからてめえを犯して犯して
犯しぬいてやるんだよ！」

ビリィッ

そんな…こんなケダモノに、
この上位種族たる私が
犯されるなんて有り得ない！
「ま、待て！早まるな！
ここで引きかえすなら
命は助けてやるぞ！」
「はあ？何言ってんだ？」

銀河帝国幹部に手を出すという事。
馬鹿な人間にはこれが
どれだけ危険な事かわからないのか！？
「なんで俺がお前と同じ能力を使えると思う？
なんで今お前は能力を使えないと思う？」
「…どういう事だ？」

ビリッ

「俺はな、怪人や超人から
その特殊な能力を奪えるんだよ。
で、今お前の力を奪って
使ってるってわけだ。
命は助ける？
お前の命もこの力も
全部俺が握ってんだよ」
「そんな、嘘だ…
そんな力聞いたことがない…」
口から出まかせを言っているに決まっている。
そんな事、あるはずがない…。
あってはならない！
「信じようが信じまいが勝手だがな、
俺に力を奪われたお前は
怪人でもなんでもねえ
…ただの人なんだよ」
「嘘だ…」
嘘だ、嘘だ、嘘だ嘘だ嘘だ！
混乱する私の目の前に
奴はゆっくりと近づいてきた。

「うぁあ…なんだよ、俺のをしゃぶっただけでもう出来上がってるじゃねえか」
「あぁ！いやぁ！そんな、強くううう！！」
「たまんねえぜコレ！汁たっぷりでギュンギュン締め付けてきやがる！いいオナホだなぁおい！」
ズチュッズチュッズリュッ！
「やめっ…！やめろ！あああああ…！！」
「あぁすっげぇ、こいつ俺のにひっちり吸い付いてきやがる！！」
「ああ、溶けちゃう…！そんな激しくされたらぁトロけちゃうううう！！♥」
ズリュッ
ズン♥
ヂチャ
ヂュ♥
ヂュ♥

「うぁあ…なんだよ、俺のをしゃぶっただけでもう出来上がってるじゃねえか」
「あぁ！いやぁ！そんな、強くううう！！」
「たまんねえぜコレ！汁たっぷりでギュンギュン締め付けてきやがる！いいオナホだなぁおい！」
ズチュッズチュッズリュッ！
「やめっ…！やめろ！あああああ…！！」
「あぁすっげぇ、こいつ俺のにびっちり吸い付いてきやがる！！」
「ああ、溶けちゃう…！そんな激しくされたらぁトロけちゃうううう！！♥」
ズリュッ
ズン♥
ヤチャ
ヤチュ♥
ヤチュ♥

「うおぉ！いいぜぇ、トロけちゃえよ！たくさん突いてやるからよぉ！」
「んほぉう、奥当たってるぅ♥ゴリゴリ抉られてるうぅう！おあっあっあっあぁあぁ！！♥」
「あぁぁあ！！！いぐうぅう！！！」
「よぉし、はぁっはぁっ！たっぷり出すぜぇ！」
びゅ～～～～っ♥ビュルルッ♥びゅっびゅびゅっ♥
「あぁあ♥あっ♥あっ♥」
「ふぅ～、へへ、まずは一発目だ、先は長いぞぉ」
「はひぃ…♥」
ビクン♥
ズン♥
ドビュッ♥
ドクン♥
ビュル♥
ズチュ♥

「うおぉ！いいぜぇ、トロけちゃえよ！たくさん突いてやるからよぉ！」
「んほぉう、奥当たってるぅ♥ゴリゴリ抉られてるぅぅぅ！おあっあっあっあぁあぁ！！♥」
「あぁぁぁあ！！！いぐぅぅぅ！！！」
「よぉし、はぁっはぁっ！たっぷり出すぜぇ！」
びゅ～～～～っ♥ビュルルッ♥びゅっびゅびゅっ♥
「あぁあ♥あっ♥あっ♥」
「ふぅ～、へへ、まずは一発目だ、先は長いぞぉ」
「はひぃ…♥」
ビクン♥
ズン♥
ドビュッ♥
ドクン♥
ビュル♥
ズチュ♥

三時間後…
「オラ！オラ！どうした、またイくのか！？情けねえ幹部様だなあ？」
「ああ、イぐぅ♥はぅぅ！」
「しょうがねえなぁ、よしイけ！イけおら！」
「おおおぉぁぁぁぁぁぁぁぁ♥♥」
「うお、締め付けきっつ…すげえイきっぷりだなこいっうぅ、こっちも出すぜ！」
ぴゅるるる！！ぼぴゅっ！ぴゅっぴゅっ！ぴゅうぅぅ！
「んほおおお！！おっおお♥」
「へへへ、もう何度目のアクメだ？とんだ淫乱幹部様だなぁ、ええ、おい！？」
「ひぐぅ、んふっ♥」
「へへ、喜べよ。次からはゴムなんてつけてやらねえからな。こっからはガチで生だ。全部膣出ししてやる」
「い、いやぁ…許してぇえ」
「いやじゃねえ、てめえは便器なんだよ男の精液を出される便器だ」
「そんな…」
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ

2時間後…

「ああぅ、お願いぃ！
もう、もうダメぇ！お願い止めてェ！」
「口では嫌がってるくせに
俺がちょっと動かしたら
もう自分から腰振ってるじゃねえか？ええ？」
「ああ違うのぉ、これは違うのおお！」
「銀河帝国の大幹部様がよぉ、
下等種族の！ちっぽけな！
戦闘員に！犯されて悔しくねえのか？ああ？」
「あぁ、悔しい♥悔しいですぅ♥」

ハッ♥ ハッ♥ ハッ♥

「オラ、おねだりしてみろ！
人間様の子種を、卑しいわたくしめに
くださいって言ってみろ！！
性処理用肉便器になります、
性奴隷になりますと誓ってみろ！！」
「ああ、そんなっ♥そんな事言えないぃ！！♥」
「言わねえとこれで終わりにしちまうぞ？
いいのか？もうイけねえんだぞ！？」
「あぁ、そんなぁ♥」

ズンッ

「なあ難しく考えるなよ、
俺の奴隷って事は周りには秘密にしてやる。
みんなの前でだけいつも通りやってりゃいい。
そのかわり毎日毎晩好きなだけセックスしてやる。
俺の性奴隷として好きなだけ
この快楽を与えてやるぞ？」
「秘密…に…」
「そうだ、たったそれだけでお前は
この世の中で一番とびきりの快楽を
ず～っと味わえるんだ。
どうだ？俺の奴隷になれよ。
悪いようにはしねえから。
俺の性処理用肉便器になると誓え。
それだけ、それだけでいいんだ。」
「わ、私は…」
「ほら、言え。
言って楽になっちまえよ」
「貴方様の…性奴隷に…
性処理用肉便器に…なります♥
人間様の子種を卑しいわたくしの…
子宮にください♥♥」
「よおし、好きなだけイけ！
子宮がパンパンになるまで出してやるぞ！」
「あぁ♥あっ♥チンポ♥
人間チンポすごいぃぃぃ♥♥」
「くぅ、出すぞ！お前がゴミ扱いする
下等種族の種で孕ませてやるぞぉ！！」
「あぁ、ちょうだい♥
下劣な人間の精子で孕ませてぇ！！♥」

ドモッ

ズチュッ

バチュッ

ゲリュッ

2時間後…

「ああぅ、お願いぃ！
もう、もうダメぇ！お願い止めてェ！」
「口では嫌がってるくせに
俺がちょっと動かしたら
もう自分から腰振ってるじゃねえか？ええ？」
「ああ違うのぉ、これは違うのおぉ！」
「銀河帝国の大幹部様がよぉ、
下等種族の！ちっぽけな！
戦闘員に！犯されて悔しくねえのか？ああ？」
「あぁ、悔しい♥悔しいですぅ♥」

ハッ♥ ハッ♥ ハッ♥ ハッ♥

「オラ、おねだりしてみろ！
人間様の子種を、卑しいわたくしめに
くださいって言ってみろ！！
性処理用肉便器になります、
性奴隷になりますと誓ってみろ！！」
「ああ、そんなっ♥そんな事言えないぃ！！♥」
「言わねえとこれで終わりにしちまうぞ？
いいのか？もうイけねえんだぞ！？」
「あぁ、そんなぁ♥」

ズンッ

「なあ難しく考えるなよ、
俺の奴隷って事は周りには秘密にしてやる。
みんなの前でだけいつも通りやってりゃいい。
そのかわり毎日毎晩好きなだけセックスしてやる。
俺の性奴隷として好きなだけ
この快楽を与えてやるぞ？」
「秘密…に…」
「そうだ、たったそれだけでお前は
この世の中で一番とびきりの快楽を
ず～っと味わえるんだ。
どうだ？俺の奴隷になれよ。
悪いようにはしねえから。
俺の性処理用肉便器になると誓え。
それだけ、それだけでいいんだ。」
「わ、私は…」
「ほら、言え。
言って楽になっちまえよ」
「貴方様の…性奴隷に…
性処理用肉便器に…なります♥
人間様の子種を卑しいわたくしの…
子宮にください♥♥」
「よおし、好きなだけイけ！
子宮がパンパンになるまで出してやるぞ！」
「あぁ♥あっ♥チンポ♥
人間チンポすごいいいぃ♥」
「くぅ、出すぞ！お前がゴミ扱いする
下等種族の種で孕ませてやるぞぉ！！」
「あぁ、ちょうだい♥
下劣な人間の精子で孕ませてぇ！！♥」

ドモュッ

ズチュ♥

ゲリュッ

バチュ♥

「おおぉぉぉ♥
イぐぅぅぅぅ！♥♥」
どびゅ～～～～～っ♥
びゅびゅびゅっ♥ぶびゅる♥♥
「おらっおらっ！出してるぞ～！
ああぁ～すっげ！
お前の腹ン中に
人間様の精液出してるぞぉ！」
「出されちゃってるぅっ♥
人間の精液♥薄汚い猿の精液
射精されちゃってるぅぅ♥♥
下等種族の子種
植え付けられちゃってるぅ♥♥」
「感じるか、ああ！？
人間様の精液で雌豚の子宮が
パンパンになってるの感じるか！？」
「おほぉ♥お♥
感じますっ感じますぅぅ♥♥
ご主人様の種を感じますぅぅぅぅ！！♥」
ビクン♥
ビクン♥
ビクン♥
ビュク♥
ビュク♥
ビュルル♥
ドクン

「おおぉぉぉ♥
イぐぅぅぅぅ！♥♥」
どびゅ～～～～～っ♥
びゅびゅびゅっ♥ぶびゅる♥♥
「おらっおらっ！出してるぞ～！
ああぁ～すっげ！
お前の腹ン中に
人間様の精液出してるぞぉ！」
「出されちゃってるぅ♥
人間の精液♥薄汚い猿の精液
射精されちゃってるぅぅ♥♥
下等種族の子種
植え付けられちゃってるぅ♥♥」
「感じるか、ああ！？
人間様の精液で雌豚の子宮が
パンパンになってるの感じるか！？」
「おほぉ♥お♥
感じますっ感じますぅぅ♥♥
ご主人様の種を感じますぅぅぅぅ！！♥」
ビクン♥
ビクン♥
ビクン♥
ビュク♥
ビュク♥
ビュルル♥
ドクン

――私はどうなってしまったのか。
体がはじける感覚と共に
目の前が真っ白になった。
脳を焼くほどの快楽が連続で押し寄せ、
理性が吹き飛んだ。
そして残ったのは快楽に屈した
ただの雌。
そうだ、私はご主人様に仕える
一匹の雌豚なのだ…。
ご主人様が全て。
ご主人様が私の全て。全て…。
ガク
ガク
ドロォ…
ピクン♥
ハマッ
ピクン♥
ハマッ
ピクッ♥
ピクッ♥
「おい、起きろ」
ご主人様の声が聞こえる。起きなくては…。
「お前の主への挨拶を教えてやるぞ」
ああ、ご主人様の声を聞くだけで子宮が疼く…。

――私はどうなってしまったのか。
体がはじける感覚と共に
目の前が真っ白になった。
脳を焼くほどの快楽が連続で押し寄せ、
理性が吹き飛んだ。
そして残ったのは快楽に屈した
ただの雌。
そうだ、私はご主人様に仕える
一匹の雌豚なのだ…。
ご主人様が全て。
ご主人様が私の全て。全て…。
ガク
ガク
トロォ…
ピクン♥
ハマッ
ピクン♥
ハマッ
ピクッ♥
ピクッ♥
「おい、起きろ」
ご主人様の声が聞こえる。起きなくては…。
「お前の主への挨拶を教えてやるぞ」
ああ、ご主人様の声を聞くだけで子宮が疼く…。

「…！」
ご主人様は私の変わりように驚いた様子だった。
きっとまだ私を信用していないだろう。
無理もない。あれだけの事をすれば…。
しかしいつかきっと信用してくださる。
誠心誠意お仕えし続ければ、
きっとご主人様は私を認めてくださる。
その時まで、私はこの方に尽くすのみ…。
「さあ、やってみろ。
俺に忠誠の示してみろ。
あの時、お前が俺に命じたようにな」
「ご主人様、永遠の忠誠を誓います。
わたくしめが行った
これまでの愚行悪行を
お許しください」

――その後…

その日も俺は組織の
ダミー会社で事務仕事に追われ
夜も十時を過ぎ、ようやく帰路についた。

残業代も出ないブラックだが、
ここでしか俺の生きる道は無い。

戦闘員として駆り出された時は
相変わらず女怪人に
こき使われ続けている。
皆の前ではいつものサド上司を
演じ続けているようだ。

メーナスの推薦で幹部候補になったが
今のところ生活は変わらずだ。

そんなサラリーマンと戦闘員を
行ったり来たりする日々にも変化があった。
大きな変化が…。

「あ、ご主人様お帰りなさいませ♥」
……メーナスだ。
プライベートをどうするかは
こいつの自由にしていたが、
まさか俺の住むアパートに
押しかけてくるとは。
隣に引っ越してきたかと思ったら、
いつの間にか合鍵を作られ、
帰ってきたら掃除洗濯料理まで
勝手にやっている始末だ。
メーナス曰く、ご主人様に公私ともに
仕えてこそ立派な奴隷、なのだそうだが。
俺は一人が（妹は別）好きなので
追い返そうとも思ったが、
こいつの料理スキルはかなり高く
外で食べるのと同じレベルの物を
当たり前のように作る。
和洋中を網羅した料理の数々は
どれも隙が無く、これがまた美味くて
今週だけでもう5キロも太ってしまった。
一体いつの間にこんなスキルを
身に付けたのか。
人間も、人間の文化も
大嫌いな宇宙人だったはずなのに。
「あの、ご主人様…♥」
夜疲れてもう寝たい時に
始まるのがおねだりだ。
なんのおねだりかって？
決まってる…。

「あぁぁぁぁぁん♥
また膣にぃ♥
子宮に沢山くださぃぃ♥」
「うぁぁ！」
ハッ♥
ハッ♥
どびゅる♥
びゅくっびゅるる♥♥
「おほっ♥おチンポすごぃぃ♥
子種汁沢山♥
生セックスキメられちゃってるぅ♥♥」
「キメられって…
お前がねだってきたんじゃ…」
ドチュ♥
ズリュ♥
ズン♥
ズブッ♥
「いぐ♥人間のザーメンで
子宮犯されてイぐぅぅぅ♥♥」
「あ〜あもぅ聞いてねえよ…」
（声抑えてくれないとまた
ご近所さんに怒られちゃうよ…）
♥終わり♥

「あぁあぁあぁあん♥
また膣にぃ♥
子宮に沢山くださぃぃ♥」
「うぁぁ！」
ハッ♥
ハッ♥
どぴゅる♥
びゅくっびゅるる♥♥
「おほっ♥おチンポすごぃぃ♥
子種汁沢山♥
生セックスキメられちゃってるぅ♥♥」
「キメられって…
お前がねだってきたんじゃ…」
ドチュ♥
ズリュ♥
ズン♥
ズブッ♥
「いぐ♥人間のザーメンで
子宮犯されてイぐぅぅぅ♥♥」
「あ～あもぅ聞いてねえよ…」
（声抑えてくれないとまた
ご近所さんに怒られちゃうよ…）
♥終わり♥